

例会要旨

天理市における教団と地域住民間の土地利用をめぐる諸相

石坂 愛（筑波大学大学院生命環境科学研究科）

第二次世界大戦後、信教の自由が認可された日本では、「新宗教」と呼称される宗教法人が独自の宗教儀礼を展開するようになった。これらの教団は、まさに高度経済成長期における都市化の歴史とともに発展し、教団は現在もなお「聖」と「俗」の重層性の中でせめぎ合いながら都市計画を遂行している。本研究では、高度経済成長期中に発展した新宗教の聖地における教団と地域住民間の土地をめぐる葛藤の実態とその要因を明らかにすることを目的とした。研究方法として、奈良県天理市において進められる、天理教教会本部の宗教都市構想の基盤となる八町四方構想に着目し、その計画地をめぐる地域住民と教団の交渉過程と、構想に対する地域住民の意識を追った。八町四方構想とは、市制施行を受けた天理教教会本部が、1953年に理想的な宗教都市を実現することを理由に打ち出した構想であり、神殿周辺に病院や教育施設の入った「おやさとやかた」という872m四方の城郭をめぐらせる計画である。そこには、①陽気ぐらし世界の実現②「八町四方」「四方正面」のプレテクトスの実現③心の成長を指す教理「ふしん」の物理的表現といったコスモロジーが込められ、城郭で囲まれた内部は聖なる空間として扱われる。2016年、おやさとやかたの約40%が完成しているが、2005年以降の竣工および完成棟はなく、計画は停滞期に突入していると言える。その理由として、①教団の財政問題②土地の交渉をめぐる問題がある。聖なる空間に立地する三島アーケード街では、2008年以降教団から経営者に対して立ち退きが要請されており、土地をめぐる交渉の実態をみることができた。調査の結果、調査対象者であった地域住民のうち約90%が天理教信者であるにも関わらず、約45%がこの構想に葛藤を抱いていることがわかった。その要因として、①「陽気ぐらし」「ふしん」など、教団の発する宗教的イデオロギーと自身の考える教理観の不一致がある。天理教は明治維新から終戦まで天皇統制による民間宗教弾圧の中で発展し、宗教法人としての形態を維持する過程においてその教理を柔軟に変容させてきたことが2000年以降の教理史研究において明らかになっており、これが葛藤を引き起こす要因となる可能性がある。また、②地域住民間の八町四方構想に関する知識共有の薄弱化も一要因として挙げられる。天理教の教理には「きりなし」、「つまり物事に終わりはない」という概念があり、これを反映して構想は期限を設けず遂行され、その結果、構想計画地周辺の住民の入れ替わりなどにより、構想に関する情報の伝達が弱まったと考えられる。そのほかの要因として、③教団と土地所有者のみで取り行われる土地・建物の譲渡交渉など、同じく交渉の遂行方法上の課題が考えられる。

郊外ニュータウン居住者における初詣行動の多様性
—“全国的な行事”初詣の地理学的理解に向けて—

卯田卓矢（名桜大学）

本発表は茨城県常総市のきぬの里を事例に、郊外ニュータウン居住者における初詣行動について検討した。地域における初詣行動を扱った研究では、来住時期が新しい住民ほど氏子意識が希薄であり、地元外の社寺を初詣対象とすることが指摘されてきた。この点は本発表の研究対象であるきぬの里においても当てはまる。きぬの里は市街地および農村地域との比較から、他地域で全体の4割以上と高い割合を示した氏神への初詣が1割未満と低かった。当地域は分譲時期が近年であり、来住時期が新しい住民が多く、地域内の神社との関わりは希薄である。そのため、居住者は氏神ではなく、「自宅近接」や「有名な社寺」などの理由から、「市内」を中心に「県内」、「県外」の社寺へ初詣を行っていた。

次に以上の点を踏まえ、きぬの里居住者の具体的な初詣行動を検討した。その結果、行動には大別してきぬの里来住後に初詣対象を変更した者と、来住後もこれまでの初詣のスタイルを踏襲する者が存在した。そのうち、前者は転居地ごとに周辺の有名な社寺へ初詣を行う傾向があった。また、これら居住者は初詣対象の探索方法として近隣住民からの情報を重視するが、その際、きぬの里は近隣住民の多くも転入者であり、住民自身も周辺社寺についての十分な知識を持ち合わせておらず、結果として近くの有名な社寺を紹介する傾向があった。そして、そのことでさらに有名社寺への初詣者の集中化が促されていた。この点は転入者が多くを占めるニュータウンの行動特性の一つと捉えられる。

一方、後者については三つのパターンが確認できた。すなわち、きぬの里と実家や前住地との近接性からこれまでと同じ初詣対象を選択する者、居住先や社寺までの距離に関係なく、自らの明確な祈願内容から初詣対象を変更しない者、実家の帰省時に実家近くの社寺へ初詣を行う者である。きぬの里ではとくに第1の居住者が多かった。この背景には近接地域からの転入者が多くを占めるきぬの里の特徴が関係している。つまり、実家や前住地が近いことで来住以前からの初詣のスタイルを踏襲することが可能であった。また、第3の行動についても分譲時期が近年であるきぬの里の特徴から、現在でも遠方の実家やその周辺の社寺とのつながりを維持する居住者が少なからず存在していると推察された。

以上、きぬの里居住者の多くは地元外を初詣対象としているものの、具体的な行動をみると、以前の初詣対象を参詣する者が存在し、そこでは前住地との近接性や明確な祈願内容、また実家とのつながりなどから居住者個々において多様な行動がみられた。とくに、ニュータウンでは様々な地域からの転入者が多く居住していることから、その傾向が顕著であると考えられる。したがって、人口移動が進行した戦後の初詣行動を解明するためには、先行研究において論点とされた氏神との関係の変化や非地元神社化だけでなく、本発表で明らかにしたような多様な行動パターンについても関心を向ける必要がある。

「道」の陰陽五行思想から読み解く時間と空間の感覚について
 —近世までの日本人の聖地信仰を理解する手掛かりとして—

川合泰代 (明治学院大学非常勤講師)

本発表は、近世までの日本人の聖地信仰を理解する手掛かりとして、中国発祥の「道」の陰陽五行思想を用いることを提案したものである。近世までの日本文化は、中国文化を手本とし、それを日本化していたものであることから、この視点は有用であると考えられる。

中国文化の根幹には、「道」の思想がある。「道」とは、言葉にはできないものの、あえていえば、生命の源、のような意味がある。日本人の文化にも、神道、修験道、お天道さま、道を極める、道徳、等々、「道」という言葉は浸透している。

本発表ではまず、老子の語ったとされる「清静経」から、「道」の思想を紹介した。次に、法則のようなものである道理から、形のない気が生まれ、気から目に見える形である象が生まれる構造を説明した。道理として、まず陰陽の説明をした。陰陽とは、相反するものが二つで一つとなり、それらが常に変化し続けることにより、生命が生き続けるという法則である。もうひとつの道理として、五行の説明をした。水・木・火・土・金の五つの要素の、相生と相剋のバランスにより、調和が成り立つという構造である。土が真ん中になる五行の変形図も説明し、これが都城の説明などで一般的に用いられる風水の図の原型であることも説明した。最後に、干支の干であり、天の理気を表す10の天干と、干支の支であり、地の理気を表す12の地支を説明し、これらが共に陰陽五行の要素の組み合わせで成り立っていることを説明した。

次に、この干支を用いて、天の気を表す時間、地の気を表す方位、人の宿命を表す八字(四柱推命)の説明を行い、天地人の性質をすべて同じ言葉で説明する世界観を説明した。

最後に、近世江戸の富士講の人々による富士山信仰を、庚申という干支を用いて読み解いた。古くから、富士信仰において申を重視する文化は存在したが、江戸の富士講では、60年に一度の庚申の年に富士山に登拝することが流行した。庚の陰陽五行の要素は金の陽、申の陰陽五行の要素は金の陽であり、干支が共に金の組み合わせは庚申のみである。また、江戸からみた富士山の方角は、24方位という方位盤を用いると、庚申の方位にあたる。また、近世江戸の富士講からみた富士山の意味は阿弥陀仏の住まう西方極楽浄土であり、これも西の金の意味がある。つまり、年も、方位も、目的地の意味も、すべて金一色で統一された信仰文化であったことが明らかとなった。

以上のように、本発表では「道」の陰陽五行思想を用いることで、近代以降の日本人が手放していった日本人の聖地信仰の源流を再発見できる可能性を、事例を用いて提示した。

山形県庄内地方における信仰の重層性と競合に関する地理学的研究

筒井 裕 (帝京大学)

日本の人文地理学分野における信仰圏研究は、1983年の岩鼻通明による出羽三山信仰圏の研究以降、次の課題を残したままとなっている。

- ① 特定の信仰の分布が疎らになる要因を「類似した属性をもつ信仰対象間の競合」と解釈し、これがいかなる状態を示すか実証的に説明していないこと。
- ② 特定の信仰圏が形成される要因を、様々な信仰の受容との関係性から考察していないこと。

以上の点を説明すべく、筆者は山形県庄内地方の霊山「鳥海山」の信仰圏と鳥海山信仰の講（登拝講）を事例に研究を進めた。同地方は鳥海山と出羽三山という「類似した属性をもつ信仰対象」が隣接し、古くから両者に対して篤信的な地域となっている。また庄内地方は、神道文化を重視する日本有数の地域でもある。本研究では、主に庄内地方に分布する登拝講83団体を対象に聞き取り調査を行い、同地方の人々が様々な信仰をどのように受容しているのかを把握するとともに、「信仰対象間の競合」とはいかなる状況を意味するか検討した。

現地調査の結果、鳥海山信仰圏内では登拝講のほかに31種類170団体の講が組織されていた。庄内地方北部（最上川以北）の各集落では、登拝講を含む鳥海山信仰の様々な講を重複的に組織し、各世帯の全構成員が通年でこれらの活動に参加する傾向にある。このため、彼らが他の信仰対象を崇める機会はほとんどない。これに対し、庄内地方南部（最上川以南）においては、伊勢神宮・古峯神社・出羽三山・鶴岡市内の寺社を信仰する講が多数組織されており、これらが鳥海山信仰の強固な定着を妨げる要因になっていると考えられる。たとえば、最上川以南の余目・三川・藤島町では伊勢神宮・古峯神社・出羽三山・鳥海山に、毎年1回ずつ代参を行う。また、戸主層のみが登拝講の活動を通して鳥海山・出羽三山に参拝するだけで、住民たちは「集落のレジャー活動」となっている伊勢神宮・古峯神社への参拝に対してより高い関心を持ち、そのために毎年、高額の費用を提供している。よって、同地域の人々の宗教的関心は分散していると言える。鶴岡市以南でも、戸主層が登拝講の活動として鳥海山・出羽三山に代参を行う。ところが、彼らを含む様々な属性の人々（既婚女性・男性有志）は出羽三山信仰の講を別個に組織し、年数回の頻度で活動を行っている。これに加え、同地域では鶴岡市内の寺社への代参（年1回）や伊勢講の集会の開催（春・秋）などの活動も盛んで、鳥海山に対する宗教的関心は著しく低くなっている。

以上から「信仰対象間の競合」とは、①特定の信仰対象がある特定の属性にのみ受容されている、またはどの属性にも受容されていない、②特定の信仰対象を崇める機会が著しく少ない、あるいは皆無である、そして③他の信仰対象に係る経済的支出を厭わないという三つの条件を満たした状況を意味するものと結論された。

2016年4月23日
於 日本大学文理学部3504教室

カナダ・ブリティッシュコロンビア州における農村空間の商品化

1. ローワー・メインランド地域におけるファーム・ダイレクト・マーケティングの特徴

仁平尊明・田林 明・菊地俊夫・兼子 純・トム ワルデチュック

2. ローワー・メインランド地域におけるサークル・ファーム・ツアーの意義

田林 明・仁平尊明・菊地俊夫・兼子 純・トム ワルデチュック

3. バンクーバー島カウチンバレー地域における農村観光の構造

兼子 純・菊地俊夫・田林 明・仁平尊明・トム ワルデチュック

4. バンクーバー島カウチンバレー地域におけるワイナリーの発展にみる農村空間の商品化

菊地俊夫・兼子 純・田林 明・仁平尊明・トム ワルデチュック

5. オカナガンバレーのケローナ地域におけるワインツーリズム

矢ヶ崎典隆

(発表者所属)

田林 明(筑波大学・名誉教授), 矢ヶ崎典隆(日本大学文理学部), 菊地俊夫(首都大学東京都市環境科学研究科), 仁平尊明(北海道大学文学研究科), 兼子 純(愛媛大学法文学部), トム ワルデチュック(カナダ・トンプソンリバーズ大学文学部)

現代の先進工業国では、農村空間の生産機能が相対的に弱まり、消費機能が強くなっているが、このことを「農村空間の商品化」として捉えることができる。発表者らは2007年から日本における農村空間の商品化について研究調査を行っており、その成果を『商品化する日本の農村空間』(2013年, 農林統計出版)と『地域振興としての農村空間の商品化』(2015年, 農林統計出版)にまとめた。さらに対象を諸外国に広げれば、より研究の視野が広がるということからカナダを選んだ。一連の発表では、魅力的な自然景観が展開し、地域ごとに特徴のある農業が営まれ、都市住民のレクリエーション活動や農村居住をはじめとして多様な形の農村空間の商品化が進んでいるカナダのブリティッシュコロンビア州を対象とした。ここでの研究課題は、それぞれの地域で農村空間の商品化がいかなる形態で、どのように進み、どのような特徴をもっているかを検討し、最終的にはブリティッシュコロンビア州の農村地域の性格と構造を明らかにすることである。ブリティッシュコロンビア州の主要な農業地域は、(1)バンクーバー島、(2)ローワー・メインランド、(3)オカナガン、(4)トンプソン、(5)カリブー、(6)クートニー、(7)ピースリバーの七つの地域であるが、バンクーバーとビクトリアを中心とした州の人口集中地域に近接し、農村空間の商品化が特に進展しているバンクーバー島とローワー・メインランド、オカナガンの三つの地域を今回の発表で取り上げることにした。

まず、仁平尊明ほかの発表は、ブリティッシュコロンビア州でも最大の人口が集積しているローワー・メインランド地域を取り上げ、そこでのファーム・ダイレクト・マーケティングの特徴を説明した。農産

物を直売するファーム・ダイレクト・マーケティングを行う農場は、バンクーバーの郊外に点在する。商品は多様であるが、果実、野菜・花卉、畜産、ファームストアの4類型に分類できる。農場の面積は小規模であり、農場主は2代目の多才な経営者が多い。彼らは、新鮮・地元・安全を宣伝し、つながりのあるリピーターへ情報を発信している。農場の経営は、都市的土地利用の圧力を受けているが、地元産の食にこだわる都市住民の需要や、農村の良いイメージに支えられて、今後も発展する可能性がある。

田林 明ほかの発表では、ローワー・メインランド地域を特徴づけるサークル・ファーム・ツアーに注目した。これは、多種類の農村観光名所を結びつけ、地図化し、それぞれの訪問先に自分で訪れさせようという試みである。これらの名所には、農産物販売所やワイナリー、レストラン、ガーデンセンター、観光農場、その他など多様な施設が含まれる。そして、自然、景観、歴史、家族志向、手作り商品のほかに、家族経営、新鮮・高品質、地元、安全・安心・エコロジー、地域社会との連携といったキーワードで示すことができる特徴があった。サークル・ファーム・ツアーの加入者の多くは、1990年代から2000年代になってこのような経営を始めており、この地域が、ここ20年ほどのうちに消費者と直接かかわりをもつ商品化された農村の性格を強めたことを物語っている。

兼子 純ほかの発表の目的は、バンクーバー島カウチンバレー地域を対象として、その農業・観光資源の構成と結びつきの分析を通じて、農村観光の構造を明らかにすることである。対象地域では近年、農業と観光業を結びつける形で地域資源を活用する取り組みがなされている。農業と観光業を結びつける活動として、カウチンベイ地域のスローシティやダンカンでのファーマーズマーケットがあげられる。これらに加えて、体験農場やワイナリーを中心として、高原地域での酪農、丘陵地での果樹・野菜生産、海岸平野での漁業や加工品販売などが有機的に結びついた形で、対象地域の農村空間を構成していることが明らかになった。

同じくバンクーバー島のカウチンバレー地域を対象とした菊地俊夫ほかの発表は、ワイナリーの発展とそれにとまなう農村空間の商品化の地域的な特徴を明らかにした。カウチンバレーの16のワイナリーは大規模ワイナリーと中規模ワイナリー、および小規模ワイナリーに類型化できる。この地域では、小規模ワイナリーから大規模ワイナリーまでが相互に結びつくことにより、ワイン産業のブランド力が高まり、ワイン産地の競争力が強化された。さらに、ワイナリーと地元農産物の生産農場とが結びつくことにより、農村空間の商品化も発展するようになった。

矢ヶ崎典隆の発表はブリティッシュコロンビア州の内陸に位置するオカナガンバレーを対象とした。ここはカナダ有数のワイン生産地域として知られ、20世紀末から急速な発展を経験した。ワインツーリズムに着目することにより、この発展過程を明らかにすることができる。オカナガンバレーワイン生産地域の中核をなすケローナ地域を対象として、32軒のワイナリーの特徴、ワインツーリズム、土地利用の変化に着目した。多様な出身国と職歴を有する人々がワイン産業に参入し、さまざまな取り組みが行われる。行政による観光振興は、観光案内所、各種のパンフレット、ワイン博物館などを通して、ワインツーリズムの基盤をなしている。ワイナリー建設と新しいワイン事業の取り組みは継続しており、ワイン産業とワインツーリズムは今後も継続して発展するように見える。